

## 内村鑑三のコヘレト書解釈

渡部和隆

\*凡例一 以下において、内村鑑三全集（岩波書店全四〇巻）を用いるが、本論では単に「全集」と表記し、かつ全集からの引用の際、表記を一部新字体に改め、また原文に施されているルビや強調の点は省略して表記する。

\*凡例二 聖書の引用は主に新共同訳によったが、一部内村自身の訳によった。

\*凡例三 その他、本論で引用されている外国語文献の訳文は、既存の翻訳を参考にしつつ、論者が訳したものである。

### 序

内村鑑三（一八六一年～一九三〇年）はキリスト教思想の歴史においては無教会キリスト教の創始者として有名な人物であるが、そのライフワークは雑誌『聖書之研究』であり、第一に聖書解釈研究者として捉えられるべき人物である。さらに、彼の系譜に属する無教会のグループから多くの聖書学者が輩出された<sup>1</sup>ことを思えば、内村を日本における聖書学ないしは聖書研究の先駆者として位置づけることも可能であろう<sup>2</sup>。ならば、その聖書解釈がどのようにしてなされているかが重要な問題として浮上する。特に、近代の聖書学が伝統的な信仰に対して破壊的な作用をなしたことを思えば、先行研究において伝統的とされる内村のキリスト教信仰<sup>3</sup>と聖書研究との関係が問われるべきである。本論はこの問題に関して、数ある聖書のテキストのなかからコヘレト書を選び、彼のコヘレト書解釈を分析するものである。なぜなら、コヘレト書はその内容と評価とをめぐって古代以来論争の絶えることのなかったテキストだからである<sup>4</sup>。コヘレト書では一見すると厭世的で虚無的に見える思想がテキスト中で展開されており、したがって伝統的な信仰とは相容れない側面を有しているにもかかわらず、内村はコヘレト書について「我等の知らんと欲する事は其伝へんとする真理である」<sup>5</sup>と語り、註解と訳<sup>6</sup>を残している。内村はコヘレト書のなかにも信仰上の真理を見出しているのである。したがって、伝統的な信仰とは一見すると相容れない思想に対して内村がどのように向き合ったのかという問題を考える上で、彼のコヘレト書解釈を分析することは大いに意義があると言えよう。むろん、内村はプロの聖書学者ではなかったし、さらに時代的に言っても、そのコヘレト書解釈には現代の旧約学から見て間違っているものが含まれていることは容易に考えられるが、にもかかわらず、内村がコヘレト書からいかなる「真理」を引き出したのかを明らかにすることは内村研究にとって

分析に値するというわけである。したがって、本発表は、内村のコヘレト書解釈がもつ旧約学的な意義よりも、内村のキリスト教思想においてコヘレト書が果たした役割を明らかにすることを狙うものである。

## 1. 扱うテキストについて

なお、本論で扱うテキストについてであるが、コヘレト書の解釈を対象とした内村の主なテキストは、内村鑑三全集の目次に従う限り、以下の三つがある。三つとも一九一五年から一九一六年にかけて発表されたテキストであり、最初の二つは『聖書之研究』の同じ号に発表された短いものである。

### ・「空の空 伝道之書第一章」全集二一巻 三三八頁～三四〇頁

一九一五年の七月一〇日の『聖書之研究』一八〇号に掲載された短文のテキスト。署名なし。六篇よりなるテキスト群の一つ。本文中で「アイザツク・ワツト」の作として引用されている讚美歌はJohn Bowringの作であり、「うつりゆく世にもかはらで立てる……」の訳文で現行讚美歌一三九番に収められている<sup>7</sup>。

### ・「聴講録（二） 伝道之書一章」全集二一巻 三六九頁～三七一頁

一九一五年の七月一〇日の『聖書之研究』一八〇号に掲載された短文のテキスト。複数のテキスト群の一つ。署名「内村鑑三口述中田信蔵筆記」。副題「六月五日故今井樟太郎氏第九回紀念日芝区白金猿町なる同家にての親睦会に於て」である。この副題が示す通り、親友今井樟太郎の没後九年目に今井家の親睦会において内村が話したことを筆記したものである<sup>8</sup>。

### ・「伝道之書 研究と解説」全集二二巻 一八頁～一二五頁

一九一五年一月一〇日『聖書之研究』一八四号より一九一六年九月一〇日同誌一九四号までの間、八号にわたって連載された長文のテキスト。署名「内村鑑三」。本篇は、旧約聖書のコヘレト書についての「研究」と本文の「解説」であり、『聖書之研究』に系統的に発表された後、一九一六年には『旧約聖書 伝道之書』として、一九二七年には『空の空なる哉伝道之書解説並に解説』として改めて、一冊にまとめて刊行された。コヘレト書についての「研究」と「解説」であり、量的にも内容的にも最も重要なテキストである。本篇は、この年一〇月から一月にかけて柏木の今井館聖書講堂において、またこれに前後して青木義雄を中心とする宇都宮の木曜会において行なわれた、伝道之書についての一連の講演をもとにしたと思われる。おそらく、この講演をもとにして「伝道之書に就て」および「伝道之書の研究」が掲載され、しばらく間をおいた後、これを受けて「伝道之書解説」が連載され、引続いて「伝道之書の研究」ということばを副題としてもつ一連の論

文を掲載して、しめくくったのであろう。はじめ『聖書之研究』に連載された際の表題・副題等を、継承関係に留意して、表示すれば次のようである。

一八四号	一九一五年	十一月	伝道の書に就て
一八五号		十二月	伝道之書の研究(前号のつゞき)
一八九号	一九一六年	四月	伝道之書解釈(上)
一九〇号		五月	伝道之書解釈(中)
一九一号		六月	伝道之書解釈(下)
			コーヘレスの発見
一九二号		七月	コーヘレスの中庸道伝道之書の研究(続き)
一九三号		八月	事業熱に捕へられしコーヘレス伝道之書の研究(続き)
一九四号		九月	官吏生活を試みしコーヘレス伝道之書の研究(続き)

この「伝道之書 研究と解釈」は長期にわたり、コヘレト書の大半について掲載された長文のテキストであり、量的にも質的にみても、内村のコヘレト書解釈の集大成であると言えよう<sup>9</sup>。

これら三つのテキスト全てに共通していることは、一九一五年～一九一六年という再臨運動の前夜とでもいうべき時期に発表されたことである。李慶愛は内村の再臨信仰について、娘ルツの死と第一次世界大戦とがその形成にあたって重要な役割を果たし、アメリカの友人ベルから送られた雑誌『日曜学校時評』(The Sunday School Times)が再臨信仰誕生の一つの契機をなし、再臨運動が生じたという<sup>10</sup>。ルツの死が一九一二年、第一次世界大戦勃発が一九一四年、ベルから雑誌『日曜学校時評』(The Sunday School Times)を受け取ったのが一九一六年、再臨運動の開始が一九一八年であることから、三つのコヘレト書の註解がなされたのは再臨信仰が、娘ルツの死と第一次世界大戦とから甚大な影響を受けつつも、雑誌『日曜学校時評』(The Sunday School Times)によって形になるにはまだ至っていない、まさに前夜とでも呼ぶべき時期であったと言えよう。

さらに、内村は全集二二巻の「伝道之書 研究と解釈」において「此解釈を為すに当り訳者は下の三書に負ふ所が甚だ多い、即ちEcclesiastes: by Dr.E.H.Plumptre<sup>11</sup> ; The Book of Ecclesiastes: by Dr.Samuel Cox; Ditto: by George A. Barton<sup>12</sup>.」と述べている<sup>13</sup>。内村は自分が参考にした注解書について明示しているのである。これらのうち、論者は、E.H.Plumptreの注解書とGeorge A. Bartonの注解書を参照することができた。

・ Ecclesiastes; or, The Preacher with notes and introduction by E. H. Plumptre. -- Stereotyped ed. -- The University Press, 1898. -- (Cambridge Bible for schools and colleges)

・ A critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastes by George Aaron Barton. -- Charles Scribner's Sons, 1908. -- (The international critical commentary)

この二つの著作は共に北海道大学に遺されている内村鑑三文庫にも収められている<sup>14</sup>。ただし、本論で参照することができたのは内村の手沢本ではない。両者ともに京都大学文学部図書館に所蔵されていた同じ作者による同名の著作である。Coxに関しては、内村鑑三文庫に、

・ The Book of Ecclesiastes, N.Y. A.C.A.Armstrong 1903 (The expositor's Bible)

が遺されているのを確認できたが<sup>15</sup>、内村の手沢本はおろか、同名の書物に目を通すことさえできなかった。確認することができた二人に関しては、ともにイギリスやアメリカといった英語圏で研究や活動を行った人物である。

以下、これらのテキストや本を中心に、他のテキストも適宜参照しつつ、内村のコヘレト書解釈を分析していくこととする。

## 2. 内村のコヘレト書解釈の基本

以下、内村のコヘレト書解釈を分析していく。ここでは時系列順にテキストを分析する。

### 2-1. 「空の空 伝道之書第一章」と「聴講録(二)」

まずは「空の空 伝道之書第一章」と「聴講録(二) 伝道之書一章」とを分析する。これは『聖書之研究』の同じ号に掲載されたテキストであり、内容的にもほぼ同じことを述べている<sup>16</sup>。両者の主な主張は共に、「すべては空しい」(コヘレトの言葉一章二節)というコヘレトの言葉に対して「空ならざるもの」を対置させることである。内村によれば、富も知も名誉も学問も芸術も事業も全て「空」である。なぜなら、「是等は人が死せんとする時に彼の靈魂に満足を与ふることが出来ない」<sup>17</sup>からである。現世の事物は全て、死の問題を前にして「空」であらざるをえない。逆に言えば、「空ならざるもの」は死の問題の克服でなければならない。内村はその「空ならざるもの」について次のように言う。

「然らば人生は絶対的に失望すべきであるか、世は全然之を厭ふべきである乎、然らずである、万物悉く空であるが、唯一つ空で無い者がある。キリストと其十字架である」<sup>18</sup>

内村によれば、いかに全てが空しくとも、「唯一つ永久に実在する者」<sup>19</sup>である神が存在し、「イエスキリストは神の体現であつて、十字架は其愛の表号である」<sup>20</sup>から「神の愛、イエスキリストの十字架、……万物は敗壞に帰する時に是のみは存る」<sup>21</sup>という。キリストに「信頼りてのみ永生は有る」<sup>22</sup>のであり、いわばキリストこそが死の問題の克服であるから、「人が空を脱がれんと欲して唯此一途あるのみである」<sup>23</sup>というわけである。そして、この

ことは「過去一千九百年間の人類の実験」<sup>24</sup>によって明らかだと内村は主張する。もちろん、コヘレト書にキリストは出てこないが、それは「此事は此書には述べられずして聖書の他の所にて補はれて居る、此書の書かれたる所以は此意を示すためである」<sup>25</sup>からだと言ふ。つまり、コヘレト書はそれ単体ではなく、キリストについて書かれた聖書の他の部分との関係のなかで補完されるべきものとして把握されているのである<sup>26</sup>。内村は、文献学的な聖書学の方法とは異なり、コヘレト書を聖書の全体性や他の文書との関係において捉え、「空」や死の問題を克服する「永生」であるところのキリストという観点から解釈を行っているのである。

## 2-2. 内村の解釈と当時の聖書学

もっとも、内村の聖書解釈と当時の聖書学との関係については内村が参考にした著作との関係を第一に考えるべきであろう。実際、内村がコヘレト書を聖書の他の部分から補完して解釈している点に関して、George Aaron BartonのA critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastesにおける次のような記述が注目に値する。

「(コヘレトの教えは) クリスチャンにとっては、ぞっとさせ、またがっかりさせるような教えだが、おそらく、コヘレトの消極的な仕事は、新しくてより大きく、より真実でより一層靈感を与えるような信仰が誕生するよりも先に、廃れてしまった概念を一掃することをうまくやってのけるという働きをなしたのである。」<sup>27</sup>

Bartonによれば、新しい信仰が誕生するために今や廃れてしまった概念を一掃することがコヘレト書の消極的な意義である。もし、当時既に「過去一千九百年間の人類の実験」<sup>28</sup>によってキリストとその十字架とが神とその愛との体現であることを確信していた内村がBartonのこの文章を読んだとするならば、「新しくてより大きく、より真実でより一層靈感を与えるような信仰」をキリスト教信仰だと捉え、コヘレトの言葉はキリスト教信仰誕生のための破壊という消極的な役割を果たすのみだと考えても不思議はない。つまり、ここからインスピレーションを得た結果、積極的なことに関しては聖書の他の箇所からの補充が必要だと内村が考えた可能性がある。内村がコヘレト書を聖書の他の部分から補完して解釈しているのはBartonのような英語圏の聖書学からの影響である可能性があるのである。これはまだ推測の域を出ていない議論であるが、内村と聖書学との関係を考える際には大きなヒントとなることであろう。

## 3. 「伝道之書 研究と解説」

続いて「伝道之書 研究と解説」を分析する。

### 3-1. 「至上善」

似たような解釈の基本は、後の「伝道之書 研究と解説」にも登場する。同書において、内村はまず、コヘレト書を「人の至上善とは何ぞ (What is the summum bonum of man?) 其問題に就て論ぜんと欲する」<sup>29</sup>ものだと規定した上で、次のように言う。

「人の至上善は何である乎という問題に就て著者は其何で無き乎に就て知る所多くして、其の何で有る乎に就ては彼の知る所甚だ尠くあつた事を、即ち此大問題に対して彼は消極的解答を与ふるに成功して、積極的解答を与ふるに甚だ貧弱であつたのである」<sup>30</sup>

コヘレト書は至上善が何でないかを教えるだけで、何であるかは教えない。したがって、至上善が何であるかを知るには聖書の他の箇所より、すなわち「四福音書より又は羅馬書より」<sup>31</sup>学ばなければならない<sup>32</sup>。しかし、これを逆に言えば、コヘレト書は「神を離れて人生に真の幸福の無き事を教るに於て天下唯一の書である」<sup>33</sup>とも考えられる。かくして、智慧<sup>34</sup>、快樂<sup>35</sup>、事業<sup>36</sup>、富貴<sup>37</sup>、中庸道<sup>38</sup>といったものが至上善ではないことが明らかにされる。そして最終的に内村は「信者の実験」<sup>39</sup>により「イエスに完全の満足がある」<sup>40</sup>ことが分かるので、「人生の至上善とは?……ナザレのイエスである」<sup>41</sup>と結論づける。むろん、コヘレト書はイエスについて語っていないが、この語っていないという事実によって逆にコヘレト書はイエスが至上善であるという事実、「此事を覚るに至るの階段になる」<sup>42</sup>と位置づけられている。コヘレト書は福音書との関係において、積極的な福音書に従属する消極的なものとして把握され、新約聖書によって補完されるべきものと解釈されているのである<sup>43</sup>。

### 3-2. 「中庸道」と「極端主義」

次に内村のコヘレト書解釈において注目すべき点は、内村がコヘレト書の中に神の言葉のみならず、人間の言葉も見出している点である。内村によれば「聖書の記す言葉は悉くは神の言葉ではない、其中に多くの人の言葉がある」<sup>44</sup>が、それは「人の愚さを以て神の慧さを伝へんがためである」<sup>45</sup>と言う。そして、その最も著しい例がコヘレト書七章一節から八章一五節の部分であり、内村は「是れは確かにコーヘレスの言<sup>ことば</sup>である、神が彼を以て人類に告げし言ではない、著者自身の言葉である」<sup>46</sup>と評している。つまり「著者が光明に達せし時の言ではない、未だに暗黒に彷徨<sup>さまよ</sup>ひし時の言」<sup>47</sup>「人の真理である此世の智慧」<sup>48</sup>「智者の言の如く聞えて実は人を誤り易き此世の智慧」<sup>49</sup>であるという。むろん、内村はコヘレト書のここ以外の箇所にも、智慧、快樂、事業、富貴といったさまざまな主題を見出して解釈および批判をしているが<sup>50</sup>、本論ではその中からこのコヘレト書七章一節から八章一五

節の部分がどのように補完されているかを中心にして分析していくこととする。

内村はコヘレト書七章一節から八章一五節の主題を「中庸道」と一括し、非常に強く批判して最終的に全否定する。内村によれば、特にコヘレト書七章一五節から二〇節の箇所、すなわち、

「この空しい人生の日々に  
わたしはすべてを見極めた。  
善人がその善のゆえに滅びることもあり  
悪人がその悪のゆえに長らえることもある。  
善人すぎるな、賢すぎるな  
どうして滅びてよかろう。  
悪事をすごすな、愚かすぎるな  
どうして時も来ないのに死んでよかろう。  
一つのことをつかむのはよいが  
ほかのことからも手を放してはいけない。  
神を畏れ敬えば  
どちらも成し遂げることができる。

(中略)

善のみを行って罪を犯さないような人間は  
この地上にはいない。」<sup>51</sup>

という箇所は「中庸道の要訣」<sup>52</sup>と称すべき箇所であるが、このように中庸道とは、何事であれ、極端に走らずに適度に中間をとるものであり、「神に依らずして自から慧く世に処せんとする者の必ず採る主義方針」<sup>53</sup>とあるように、人間社会において一般的に見られる世俗的な知恵と規定される。実際、「人の智慧と云へば古今東西変ることなしであつて、イスラエル人コーヘレスの落附いた智慧も亦中庸の道であつたのである、孔子の道、釈迦の法、プラトーの理、人と云ふ人の道はすべて是れである」<sup>54</sup>「日本の智者学者政治家教育家新聞記者、然り宗教家と称せらるる者までも概ね皆なコーヘレスに倣ひて其中庸道を唱ふるのである」<sup>55</sup>といった記述が見られ、「中庸道」は古今東西の社会に共通して見出される世俗的な知恵と見なされている。そして、「中庸道」が「神を畏れない、世を恐れる」<sup>56</sup>世俗的な道徳である以上、神を信仰するキリスト者にふさわしいものではありえない。「中庸道」は本来的に「信者の賤しむべき斥くべき」<sup>57</sup>ものである。これに対し、内村は、

「言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」<sup>58</sup>

「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりな

さい。」<sup>59</sup>

「もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」<sup>60</sup>

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。」<sup>61</sup>

「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」<sup>62</sup>

といった極端なことを勧める福音書の言葉<sup>63</sup>を対置する。なぜなら、「『義人の正義を行ふて亡ぶるあり』、イエスの如きエレミヤの如きは其实例である、釈迦と孔子とは之に異なり、能く中庸の道を守りしが故に長寿を保ち多く教へて多く楽んだのである」<sup>64</sup>とあるように、釈迦や孔子といった人の智慧が「中庸道」であるのに対し、神の側に立つイエスやエレミヤの立場が「極端主義」だからである。つまり、人の智慧であるコヘレト書のこの箇所は、福音書の補完により神の立場と二項対立を形成し、人の智慧である「中庸道」は切り捨てられ、神の立場である「極端主義」が採られることとなる。かくして、コヘレト書の「人の言葉」は、

「然りアーメン、余輩も亦神の恩恵と援助とに由り、不可能と称せられ、極点と譏らるる<sup>せま</sup>瞶き小さき門より入りて、此世の事業の失敗を期して真の基督者たらんことを欲す」<sup>65</sup>

というキリスト者のとるべき態度、「極端主義」を逆説的に示すこととなる。つまり、コヘレト書の「人の言葉」は、否定を媒介として神の言葉である福音書の補完を受け、キリスト者のとるべき態度、「極端主義」を呈示するのである。

注目すべきことに、内村はコヘレトもまた最終的には「極端主義」に帰っていったと言う。内村によれば、そもそも、コヘレトは「人生の至上善を求めて得ず、而かも天よりの黙示の臨むあるなくして、彼れも亦止むを得ずして人の道にして俗人の智慧なる中庸の道に暫時の休息を求めた」<sup>66</sup>のであり、その選択は、神の啓示にではなく、世俗的な知に基づくやむを得ない選択であった。それゆえ、神の啓示が得られたならば、「中庸道」はすぐに捨てるべきものである。実際、内村は、

「ヒブライ人なりしコーヘレスは永く此道に止まり得なかつた、其血にアブラハム、モーセ等の熱誠を受け、其心にイザヤ、エレミヤ等の精神を継ぎし彼は冷やかにも非ず熱くも非ず微温き中庸道の主唱者を以て終ることは出来なかつた」<sup>67</sup>



と主張する。ここで内村はコヘレト書十一章一節「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」を引用する。内村によれば、この箇所は「汝のパンを水の上に投げよ、無効と知りつつ愛を行へ、人に善を為して其結果を望む勿れ、物を施して感謝をさへ望む勿れ、ただ愛せよ、ただ施せよ、ただ善なれ」<sup>68</sup>という慈善の勧めの意味であり、「中庸道」とは真逆の「極端主義」を表現している。そして、この箇所を「智者の言ではない、信仰家の言である」<sup>69</sup>と評して、次のように言う。

「人生を解して人は何人も失望せざるを得ない、神を信じて人は何人も希望満々たる生涯に入るのである、智者コーヘレスは憐むべき人であつた、彼の最上の智慧は中庸道であつた、信者コーヘレスは羨むべき人であつた、彼は愛の実行に自己を忘れて却て能く人生を解するに至った」<sup>70</sup>

神なしの此岸の世界に妥当する知によって生きることが全否定された後、まったく別種の生き方として信仰が肯定的に対置され、それによって問題は解決するとされている。内村自身の言い方をすれば、これは「人生の哲学的解決ではない、其の実際的解決」<sup>71</sup>であり、「神を畏れ、その戒めを守れ」というコヘレト書一二章一三節の言葉こそ、「其の実際的解決」を集約したものであると内村は言う。「中庸道」を唱える人の言葉は、否定を媒介にして新約聖書の福音書の補完を受け、最終的にキリスト者にふさわしい「信」の「極端主義」を呈示する。まさに「人の愚さを以て神の<sup>まこと</sup>慧さを伝へん」<sup>72</sup>というわけである。

### 3-3. 善行と神の審判

以上、内村のコヘレト書解釈の基本的な枠組みとそれによる実際の解釈を見てきたが、しかし、「伝道之書 研究と解説」ではこの枠組みからの逸脱や転調もまた見られる。もっとも、消極が積極を基にしないと成立しないことを思えば、コヘレト書は消極的であって積極的な福音書から補完されなければならないという内村の図式は、コヘレト書の中に福音書と関係づけられるような積極的なものを暗に見出しているとも考えられ、逸脱や転調は起こるべくして起こったとも言える。実際、前節ではコヘレト書十一章一節「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」と一二章一三節「神を畏れ、その戒めを守れ」とが、否定されることなく、むしろ肯定的な文脈で登場している。消極的なはずのコヘレト書から積極的なものが引き出されている。このことはいかにして生じたのか。

まず、内村はコヘレト書三章と十一章の解釈をセットにして以下のように行っている。三章の解釈では内村は上述の基本的な枠組みに従い、全てのことにはそれをなすべき「時」となすべきではない「時」とがあるにもかかわらず、人間はそれを知り得ないことにコヘレトは失望していたとした上で、「神の為し給ふ所は皆な其時に適ひて美はしくあれば、

我は我全部を彼に委ねまつりて、彼をして我に代り、我に在りて、万事を其時に適ひて行はしむべきである」<sup>73</sup>とあるように、「信仰の必要」<sup>74</sup>や「キリストの援助」<sup>75</sup>による補完が必要だと主張する。ここでもコヘレト書は消極的なものとされ、新約聖書という積極的なものによって補完されている。内村はこれに続き、「時を撰ばざる事業」と題して一章の解釈に移行する。内村はコヘレト書一章一節「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう。」を、「善事常行の必要」<sup>76</sup>を説くものであり、「善を為すに時と所とを択ぶ勿れ」<sup>77</sup>「時を撰ばず場所を択ばず善事を行へ」<sup>78</sup>という意味だと主張する。その際、この聖句は第一コリント書一五節五八節「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。」とルカ福音書一六章の不正な管理人の譬え、特にルカ福音書一六章九節「そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」によって補完を受け、「慈善は最善の放資である、災害の地に在らん時の、其の時のための最も確実なる準備である、永遠の国に至らん時に独り淋しく之に入るに非ずして、多くの友に迎へられんが為である」<sup>79</sup>と解釈されている。終末論的な意識の片鱗が垣間見えると言えよう。そして、「斯くなしてこそ始めて真の幸福はあるなれ」<sup>80</sup>とあるように、議論は幸福の議論へと接続される。内村によれば、コヘレトは、全ては空しいと言いつつも「然し彼はユダヤ人である、彼は祖先の宗教の遺傳的感化を受けて、肉慾主義又は厭世主義に終ることは出来なかった」<sup>81</sup>のであり、「何処かに遁道を発見せざるを得なかった」<sup>82</sup>という。そして、コヘレトが発見した「遁道」とは、結果や報酬を考えずに惜しみなく善を施すことが彼に結果や報酬といった幸福とは別の種類の幸福を与えるということであった。すなわち、

「善を為して倦まざるの報償は茲に在り、日光を楽しみ得るにあり、而して汝も亦日々善行のパンを此世の水の上に投げて、世は汝に報ずと雖も、日光を楽しみ得る者となりて裕かに神に報いらるべし。」<sup>83</sup>

という状態が得られるということであった。「世の所謂幸福は幸福ではない」<sup>84</sup>が、無償の善行はコヘレトに上記のような、「世の所謂幸福」とは異なる幸福をもたらした。純粋な愛に基づく無償の善行、現世での徳と幸福との一致を目指さない善行が現世的な応報倫理によってもたらされるような幸福や「世の所謂幸福」とは別の種類の幸福、「日光を楽しみ得る」<sup>85</sup>幸福をもたらす。内村はコヘレト書十一章七節<sup>86</sup>を参照しつつ、「愛は汝をして日光を楽しみ得る者となすべし、日々汝を照らすの日光、汝は今日まで之を楽しむを得ざりき、汝は幸福を愛の行為以外に於て求めて人生最大の幸福たる日光を楽しむを得ざりき、而して世に楽しき者として日々すべての人を照らす太陽の光線に愈る者あらんや」<sup>87</sup>と述べる

である。したがって、

「人生は幸福ならざるべからず、而して愛の生涯のみ幸福の生涯なりと彼は解した（中略）彼は茲に人生の至上善を発見した、純愛を以て世に対し、我が有つもの之に惜みなく与ふること、其事が至上善、最大幸福であると彼は暁った、実に彼の探求は其目的に達したのである。」<sup>88</sup>

とあるように、愛の生涯こそが幸福であるというのがコヘレトの発見した「至上善」であると内村は言う<sup>89</sup>。「人生の至上善は智慧に非ず、快樂に非ず、功績に非ず、惜むことなく施すに在りと彼は暁った」<sup>90</sup>のであり、「惜むことなく与へよ、報償を眼中に措かずして善を為すべし、多年を経て後に、或は今世を終りて後に汝或ひは再び之を手にするを得ん、望まざるに其結果を見るを得ん」<sup>91</sup>というわけである。

興味深いのは、これを支えるのが神の審判という終末論的な時間意識だということである。内村はコヘレト書一章九～一〇節を解釈する際<sup>92</sup>、「コヘレトは更に尚ほ一<sup>ひとつ</sup>の発見をなした、それは神が世を審判<sup>さばん</sup>き給ふと云ふ事であつた」<sup>93</sup>と語り、神の審判について次のように言う。地上は徳と幸福とが一致しない状態であるため、「是も亦空なり」<sup>94</sup>と言わざるを得ない。しかし、「審判は万事の判明である、罪は罪、義は義として判明せらるる事である」<sup>95</sup>と言われるところの神の審判が空なるこの矛盾を解決する。神の審判は「我罪も顕るれば我義も顕はるるのである」<sup>96</sup>から「斯くて善を為す事の無益ならざることが明白に示さるのである」<sup>97</sup>と内村は主張する。神の審判は善を善として、悪を悪としてはっきりさせるので、徳と幸福との不一致という矛盾が解消されるというわけである。したがって、神の審判は恐怖の対象ではなく、むしろ「エホバが世を鞫<sup>さば</sup>き民を審判<sup>さばん</sup>き給ふ事は<sup>べんぶじやくやく</sup>抔舞雀躍して迎ふるべき事」<sup>98</sup>だとされる。なぜなら、「神万事を鞫<sup>さば</sup>はし万事を鞫<sup>さば</sup>き給ふと暁りて不平は其根底より絶たれ、悲哀は消えて跡なきに至つた」<sup>99</sup>からである。神の審判は恐怖の対象ではなく、むしろ歓喜の対象とされている。内村はこのような神の審判の観念を、「基督者の日々の祈禱たる『主イエスよ来り給へ』との祈求も亦之に外ならない」<sup>100</sup>とあるように、キリストの再臨に結び付け、神の審判によって愛に基づく無償の善の行為が決して無駄にはならないことが保証されると主張するのである。

かくして、内村はコヘレト書から至上善として、無償の善の行為をなし続ける「愛の生涯」と神の審判を待望する「歓喜の生涯」という二つの積極的なものを引き出す。「愛の生涯」は「歓喜の生涯」に支えられて至上善をなす。ここで内村は先述したコヘレト書解釈の基本を逸脱し、消極的なものしかないはずのコヘレト書から積極的なもの、すなわち「真理」を引き出していると言えよう。そして、この二つは「神を畏れ、その戒めを守れ」というコヘレト書一二章一三節の言葉へと集約される<sup>101</sup>。「人生の目的は茲に在るのである、生涯の意味は茲に在るのである（中略）神を畏れ、其誠命<sup>まこと</sup>を守る事、<sup>まこと</sup>實に之以外に人生といふ真<sup>まこと</sup>の人生は無いのである。」<sup>102</sup>つまり、終末論的な時間意識を持ちつつ、現世で

善をなしながら生きていくことを肯定する形でこの章の解釈は閉じられるのである。

### 3-4. 「伝道之書 研究と解説」と当時の聖書学

以上が「伝道之書 研究と解説」における議論であるが、これを内村が使用した注解書と比較すると、いくつかの事実が指摘できる。

まず、前にコヘレト書一章一節がルカ福音書一六章九節によって補完されることを指摘したが、このことについて、George Aaron BartonのA critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastesに次のような興味深い記述がある。Bartonは、コヘレト書のこの箇所を「寛大さへの訓戒 (an exhortation to liberality)」<sup>103</sup>と解釈し、さらに

「もし、これがこの節の意味であるなら、その思考はルカ福音書一六章九節におけるイエスの訓戒『不義の富によってあなた自身に友人を作りなさい。』と同種のものである。』<sup>104</sup>

と述べている。ひょっとすると、ルカ福音書によるこの節の補完は、内村がBartonのこの文章を読んだことから受けたインスピレーションの産物であるかもしれない。

次に、コヘレト書七章一五節から二〇節の注解において内村がコヘレト書のこの箇所を引用する際、一九節を省略している点についてであるが、これに関しては、George Aaron BartonのA critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastesには次のような記述がある。すなわち。

「この節に先行する文脈との知的な関係を見出すことは不可能である。疑いもなく、箴言に興味のあった註解者による挿入句である。』<sup>105</sup>

という記述である。おそらく、内村はGeorge Aaron Bartonのこの註解を受けて、コヘレト書の訳の本文から一九節を外したのであろう。

第三に、内村がコヘレト書の一三章九節以下をも対象に含めて注解を残している点であるが、現代の聖書学ではここは複数の編集者による補遺だとされている。つまり、「コヘレトは人生や世界の不条理性、幸・不幸や善・悪の区別の無意味性などを指摘し、伝統的な思考の枠組みを根柢から衝き崩そうとしたが、本書の最終編集者はこの最後の文章を付け加えることにより、そうした一種のラディカリズムを緩和し、その思想的「破壊性」を律法主義的立場から繕おう」<sup>106</sup>としたものとされている。この点については、内村が直接参考にしたE. H. PlumptreのEcclesiastes; or, The Preacherのなかに以下のような興味深い記述がある。PlumptreのEcclesiastes; or, The Preacherは、コヘレト書一三章一三節の“Fear God, and keep his commandments”に関して、

「これは、言ってみれば、この書を編集した教師がその結論および実質として彼の弟子たちに提示したものであり、そうすることにおいて彼は間違っていない。ここにおいて、論者自身が、彼の思索の放浪の後に休息を得たのである。（中略）他のものがどんなに『空であり、風を感じる』のようであったとしても、永遠の存在者の戒律、すなわち『今日のものでも昨日のものでもない』ところの律法を守ることのうちに安全と平和があったのである。」<sup>107</sup>

と述べている。Plumptreは、ここは編集者による補遺ではないとしており、さらに一二章九節以下で示される思想とそれ以外のコヘレト書の箇所で開催される思想との間に齟齬はなく、むしろそれを集約した「結論」を見出しているのである。内村が補遺であるこの箇所をコヘレト書における積極的なものと見なすことができたのは、このE. H. Plumptreの聖書解釈が念頭にあったためかも知れない。さらに、Plumptreの議論が、「律法」をイエス・キリストに変えれば、新約聖書による補完を説く内村の議論と構造的に類似している点もまた興味深い事実である。

また、Plumptreに関しては、コヘレト書一二章一四節の注解において、

「著者の目的は、最も低い型の快樂主義の放縦を説くことではなかったし、魂の不死性を否定することでもなかった。一時はそれをはっきりと主張するのを躊躇したことがあったにしても、である。そうではなく、むしろ真理を実行することであり、その真理は、罰と報いと異例の分配を伴うところの、この生では見られるものの不完全にしか見られない、かの義なる審判の信仰を含んでいる。そしてその審判は、以前ではないにしても、『霊が与え主である神に帰る』（七節）ときには必ずその存在を主張するものである。」<sup>108</sup>

と述べている点が注目に値する。Plumptreはコヘレト書を終末論的な観点から解釈して「イスラエルの教えはイスラエルの信仰と不整合なものではない」<sup>109</sup>と述べ、それをさらにキリスト者である自分たちに引きつけて「この書は、真理の追求に関する他の真実な記録と同様に、迷路のような懐疑の螺旋を通して義務の目標へ、対立する諸意見の波と風を通して永遠の存在者の戒律の揺るぐことのない岩へ、人々を導いた」<sup>110</sup>と解釈しているのである。内村が終末論的な観点からコヘレト書を解釈したのはPlumptreの注解書からの影響である可能性があると言えよう。

以上はまだ推測の域を出ていない議論ではあるが、内村と聖書学との関係を考える際には大きなヒントとなることであろう。

#### 4. 結論

以上の分析から次のことが言えるだろう。まず、内村のコヘレト書解釈においては、コ

ヘレト書と新約聖書とが連続性の相の下に把握されていることが挙げられる。コヘレト書はそれ単体だけでは不十分で、新約聖書からの補完を受けるべきものとされており、いわば新約聖書と一体になった形で解釈されている。これは近代的な聖書学とは大きく異なる手法である。しかし、重要なことは、内村においてコヘレト書のキリスト教信仰に対する破壊的な側面は、新約聖書を中心とする聖書の全体性を重視することによって抑えられていることであり、その背後に英米圏の聖書学に由来するインスピレーションが潜んでいることである。このような解釈の仕方は当時の英米圏の聖書学の知見に内村の言うキリスト者の「実験」による確信を加えることによってなされていると言えよう<sup>111</sup>。そして、新約聖書からの補完によって、コヘレト書中の「人の言葉」さえ、否定を媒介とすることで「神の慧さ」を呈示するものとして新約聖書やキリスト教信仰と連続的に解釈されているのである。

次に、終末論が重要な主題として登場していることが挙げられる<sup>112</sup>。終末における神の審判では徳と幸福との不一致が解決されるので、神の審判は恐怖の対象ではなく、歓喜の対象とされ、しかも同時に現世で善をなしながら生きていくことを肯定する根拠でもあるとされている。内村のコヘレト書解釈において、コヘレト書のキリスト教信仰に対する破壊的な側面は「中庸道」という世俗の知恵に帰され、終末における神の審判によって克服されることとなっている。聖書解釈が終末論やキリストの再臨の観点からなされ、それによって破壊的な側面が抑制されているのである<sup>113</sup>。内村は後の再臨運動の時期に「再臨を信ずるに由て余は初めて聖書が解し易き書となつた」<sup>114</sup>と語っているが、このように再臨の教義とはまさに聖書解釈の問題でもあった。したがって、内村のキリスト教信仰によって、コヘレト書はまさに再臨の教義によって整合的に理解することができるようになった聖書の具体的な箇所の一つであったと推測することは可能だろう。つまり、内村は、ドイツ語圏の聖書学よりも当時の英米圏の聖書学の方を参照しつつも、新約聖書を中心とする聖書の全体性を重視し、さらに終末論的観点を持ち込むことによって、コヘレト書のキリスト教信仰に対する破壊的な側面を抑えたのである。

なお、「知」と「信」および「知」と行為との関係が興味深い問題として挙げるができるだろう。内村においては、「中庸道」のような一般的な思惟によって把握できるものよりも、一般的な思惟を越えていてそれによつては把握できないものの方が問題であり、「極端主義」や純粋な愛に基づく無償の善行のような行為こそがその外側へと関わる事ができるとされている。つまり、内村のキリスト教思想では一般的な思惟を超えた先にあるものが問題となっており、そこに至るには行為によるしかない。コヘレト書はこの考え方を裏付けするような例のひとつであったと考えられるのである。知の限界とその克服が問題として考えられているのである。ここで興味深いのは内村が「知」をギリシアに、「信」と行為とをユダヤに帰して考えていることである<sup>115</sup>。内村は、コヘレトが「中庸道」を捨てて「信」に入った時、「彼は茲に全然ギリシヤ風の哲学者の儒服を脱して、ヒブライ風の預言者の外套を己が肩に懸けたのである」<sup>116</sup>と語るが、この箇所は内村が、「知」対

して「信」を、「ギリシヤ」に対して「ヒブライ」を、「哲学者」に対して「預言者」をそれぞれ対置させて考えていることを示している。この図式の背後には、内村なりのヘレニズムとヘブライズムとの理解があると推測されるが<sup>17</sup>、これに関しては今後の課題としたい。

<sup>1</sup> 無教会キリスト教からは、内村の弟子の塚本虎二（一八八五年～一九七三年）や黒崎幸吉（一八八六年～一九七〇年）を介して関根正雄（一九一二年～二〇〇〇年）、中沢洽樹（一九一五年～一九九七年）、前田護郎（一九一五年～一九八〇年）といった多くの聖書学者が輩出された。赤江達也『紙上の教会 無教会キリスト教の歴史社会学』岩波書店 二〇一三年 二五七～二六二頁

<sup>2</sup> 無教会系の旧約学者である中沢洽樹は、「内村の研究法は、現代聖書学の線に沿うものです。殊に今から七〇年前にすでにヘブライ的思考と語法の重要性を指摘したあたりは、さすがに炯眼と言わざるを得ません。」（「無教会における学問の方向」中沢洽樹選集 三巻 一九九九年 三〇一頁 なお、このテキストの初出は一九六九年である。）とあるように、内村の聖書解釈を高く評価している。さらに、中沢はそのコヘレト書注解のなかで内村のコヘレト書解釈に言及し、「日本でこの書についての研究らしいものの草分けは、やはり内村鑑三である。」（中沢洽樹『「空の空」一知の敗北』山本書店 一九八五年 一頁）と、これもまた肯定的に評価している。無教会系ではあるものの、プロの聖書学者が内村の聖書解釈を日本における聖書研究の「草分け」と高く評価している点は特筆すべき事柄であろう。

<sup>3</sup> 内村のキリスト教理解に関しては、古くから「（内村の）キリスト教理解はことさらに独創的なものはない」（土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社 一九八〇年 一八七頁）と言われてきた。最近でも「内村のキリスト教信仰そのものは非常にオーソドックスなものである」（岩野祐介『無教会という教会 ——内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』教文館 二〇一三年 一八五頁）と言われている。

<sup>4</sup> 「本書はユダヤ教正典の諸書に属するが（「解説 メギロートについて」参照）、その評価をめぐっては特に著者の思想傾向との関係で、古代以来激しく論争されてきた。」『<旧約聖書XIII> ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』訳者 月本昭男・勝村弘也 一九九八年 岩波書店 二〇六頁

<sup>5</sup> 『伝道の書 研究と解説』内村鑑三全集二二巻 一八頁 岩波書店

<sup>6</sup> 全集二二巻 八四頁以下を参照。

<sup>7</sup> 全集二一巻 五五七頁の解題を参照。

- 
- <sup>8</sup> 全集二一巻 五五八頁の解題を参照。
- <sup>9</sup> 全集二二巻 四八〇頁～四八四頁の解題を参照。
- <sup>10</sup> 李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想』九州大学出版 二〇〇三年 一〇九頁～一一五頁を参照。
- <sup>11</sup> おそらく、英国教会聖職、神学者、古典学者エドワード・ヘイズ・プランプトリ (Edward Hayes Plumptre) 一八二一年～一八九一年 のことを指す。キリスト教人名辞典 日本基督教団出版局 一九八六年 一三一一頁を参照。
- <sup>12</sup> おそらく、アメリカの聖書学者ジョージ・アーロン・バートン (George Aaron Barton) 一八五九年～一九四二年 のことを指す。キリスト教人名辞典 日本基督教団出版局 一九八六年 一一〇九頁を参照。
- <sup>13</sup> 全集二二巻 一二四頁
- <sup>14</sup> The catalogue of Uchimura Library 1955年 北海道大学図書館を参照。
- <sup>15</sup> The catalogue of Uchimura Library 1955年 北海道大学図書館を参照。
- <sup>16</sup> ただし、「聴講録(二)」の方には、副題にもあるように今井樟太郎の遺族への慰めの言葉がつけられている。「此今井家は幾多の艱難の中に在りしも恵みの下に今日在るを得て、世に多少の善事をもなし空ならざる事のために尽す所があつたのは余の深く神に感謝する所である。」(全集二一巻 三七一頁)
- <sup>17</sup> 全集二一巻 三三九頁
- <sup>18</sup> 全集二一巻 三三九頁
- <sup>19</sup> 全集二一巻 三四〇頁
- <sup>20</sup> 全集二一巻 三四〇頁
- <sup>21</sup> 全集二一巻 三四〇頁
- <sup>22</sup> 全集二一巻 三四〇頁
- <sup>23</sup> 全集二一巻 三四〇頁
- <sup>24</sup> 全集二一巻 三三九頁
- <sup>25</sup> 全集二一巻 三六九頁
- <sup>26</sup> コヘレト書を新約聖書から補完されるべきものとして見る解釈は弟子たちに引き継がれている。例えば、塚本虎二は一九二七年一月に『聖書之研究』上で発表した「新しき人」という論文のなかでコヘレト書に触れた後、「しからば我らは全く絶望であるか。我らは皆悲観論者となる外ないか。(中略)然り、また、然らずである。人と物とはことごとく旧びてをり、また旧びつつある。この意味に於いては、日の下に一つの新しきものもない。従つて絶望である。しかし、かかる間にあつて天に在ます我らの神と、その独り子キリストのみは新しく、永遠に新しくあり給ふ。」(塚本虎二『私の無教会主義』伊藤節書房 一九五二年 一二二頁)と述べ、詩篇一〇二・二六とヘブライ人への手紙一三章八節とをその根拠として挙げている。この事実は塚本門下から多くの聖書学者が輩出されたことを考



えれば非常に興味深い事実であるが、これに関しては今後の課題としたい。

<sup>27</sup> A critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastes by George Aaron Barton. -- Charles Scribner's Sons, 1908. -- (The international critical commentary) p.50

<sup>28</sup> 全集 二一巻 三三九頁

<sup>29</sup> 全集二二巻 一九頁 なお、内村はこの規定をコヘレト書二章三節「わたしの心は何事も知恵に聞こうとする。しかしなお、この天の下に生きる短い一生の間、何をすれば人の子らは幸福になるのかを見極めるまで、酒で肉体を刺激し、愚行に身を任せてみよう」と心に定めた。」から引用しているが、ここからthe summum bonumの探求という規定を導き出すのは若干無理があるように感じられる。実際、内村は「何をすれば人の子らは幸福になるのか」という部分のみを文脈から切り離して取り出してくることで、このような規定を行っている。おそらく、内村は自分の血肉と化した聖句をコラージュのように用いることによってthe summum bonumの探求という規定を行っているのであろう。管見の限り、このthe summum bonumという言葉は内村が使用した聖書の参考書には見当たらず、その出典や根拠は不明である。一応、内村におけるthe summum bonumの用例は「伝道之書 研究と解釈」を除くとほかに三箇所（“THOUGHTS AND REFLECTIONS.” 全集五巻 一〇九頁（一八九七年一〇月二四日『万朝報』英文欄）、「聖霊を受けし時の感覚 七月一日角筈自宅に於て為せる講演の一節」全集一四巻 二二九頁（一九〇六年八月一〇日『聖書之研究』七八号）、“SUMMUM BONUM.” 和訳「至高善」全集二九巻 四六〇頁（一九二六年四月一〇日『聖書之研究』三〇九号））が存在するが、どれもコヘレト書には言及していない。しかし、“SUMMUM BONUM.” 和訳「至高善」（全集二九巻 四六〇頁）での使用がカント哲学の感想のなかである点は興味深い。のちに見ることになるが、本文中で内村がカントの名前に言及していることを思えば、この言葉は聖書解釈というよりも、当時日本に流入してきた欧米の哲学の方に背景をもっている可能性が高い。今後の研究課題としたい。なお、“SUMMUM BONUM.” 和訳「至高善」の全集における解題には北海道大学附属図書館の内村文庫に、

・ Immanuel Kant, *Fundamental Principles of the Metaphysic of Ethics; Extracted from “Kant’ s Critique of Practical Reason”*, etc., 1911

が収められていることが指摘されている（全集二九巻 五六〇頁）。この本は全集三五巻 三二九頁の一九二八年六月一日の日記で初めて言及されているが、その時点で「復習した」と述べられており、それ以前に読んでいたとしてもおかしくはない。

<sup>30</sup> 全集二二巻 二〇頁

<sup>31</sup> 全集二二巻 二〇頁

<sup>32</sup> このコヘレト書解釈における新約聖書との関係性に関して先行研究でも指摘されているところである。「内村は旧約を重視していると言われるが、これは旧約を旧約として重視したというよりも、新約からさかのぼる形で重視していると言えるのではないかと思われる

る。例えば、ヨブ記やコヘレト書等に関して、それらで示される義人の苦難やこの世のむなしさという問題は、イエス・キリストの福音により解決されると考える」岩野祐介『無教会としての教会 ——内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』教文館 二〇一三年 二九頁

<sup>33</sup> 全集二二巻 二〇頁

<sup>34</sup> コヘレト書一章一二～一八節がそれに該当するとされている。

<sup>35</sup> コヘレト書二章一～一一節がそれに該当するとされている。なおコヘレト書二章一二節～二六節は快樂と知との関係に関する付録とされている。

<sup>36</sup> コヘレト書三章一節～五章二〇節がそれに該当するとされている。

<sup>37</sup> コヘレト書六章一～一二節がそれに該当するとされている。

<sup>38</sup> コヘレト書七章一節～八章一五節がそれに該当するとされている。

<sup>39</sup> 全集二二巻 二八頁

<sup>40</sup> 全集二二巻 二八頁

<sup>41</sup> 全集二二巻 二八頁

<sup>42</sup> 全集二二巻 三〇頁

<sup>43</sup> イエスがコヘレト書の文脈の外に位置するにも拘わらず、コヘレト書の解釈に「至上善」として登場することの背景には、上記の理由の他にも、内村の信仰のキリスト論的集中が反映していると推測される。既に一九〇九年の時点で内村は「人生唯一の目的は神を識るに在る、而して神を識る唯一の途はキリストを識るに在る」（「人生の目的と之に達する途」全集一六巻 二二三頁）と語っており、時の流れと共に深められていった信仰のキリスト論的集中が内村をしてキリストの啓示こそが最も純粋な神の啓示であると考えせしめたのであろう。

<sup>44</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>45</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>46</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>47</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>48</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>49</sup> 全集二二巻 四六頁

<sup>50</sup> これらの様々な主題のうち、教育観・事業観・労働観については、原島正「内村鑑三の教育観・事業観・労働観 ——内村鑑三著『空の空なる哉 伝道之書解訳並に解説』を中心に」（東海大学第二工学部 創立三十周年記念誌 一九九四年）に詳細に述べられているので、そちらを参照されたい。

<sup>51</sup> コヘレト書七章一五節から二〇節。ただし、内村はコヘレト書のこの箇所を引用する際、一九節を省略している。

<sup>52</sup> 全集二二巻 五〇頁

- 
- <sup>53</sup> 全集二二巻 四七頁
- <sup>54</sup> 全集二二巻 四七頁 なお、東洋思想やプラトンの何が「中庸道」に当たるかは不明である。内村も本テキスト中では特に議論はしていない。内村が何を念頭においてこのような発言をしているかは今後の研究課題としたい。
- <sup>55</sup> 全集二二巻 五一頁
- <sup>56</sup> 全集二二巻 五三頁
- <sup>57</sup> 全集二二巻 五二頁
- <sup>58</sup> マタイ福音書五章二〇節
- <sup>59</sup> マタイ福音書五章四八節
- <sup>60</sup> マタイ福音書五章二九～三〇節
- <sup>61</sup> ルカ福音書一四章二六節
- <sup>62</sup> ヨハネ福音書一二章二五節
- <sup>63</sup> 全集二二巻 五〇頁参照
- <sup>64</sup> 全集二二巻 五〇頁
- <sup>65</sup> 全集二二巻 五二頁 なお、内村はこの言葉をキルケゴールの言葉として引用しているが、管見の限り、出典は不明である。
- <sup>66</sup> 全集二二巻 四七頁
- <sup>67</sup> 全集二二巻 五七頁 なお、ここに内村におけるヘレニズムとヘブライズムとの対立が民族のメタファーを通して垣間見える点は興味深い。
- <sup>68</sup> 全集二二巻 四一頁
- <sup>69</sup> 全集二二巻 五七頁
- <sup>70</sup> 全集二二巻 五八頁
- <sup>71</sup> 全集二二巻 五八頁
- <sup>72</sup> 全集二二巻 四六頁
- <sup>73</sup> 全集二二巻 三三頁
- <sup>74</sup> 全集二二巻 三三頁
- <sup>75</sup> 全集二二巻 三三頁
- <sup>76</sup> 全集二二巻 三四頁
- <sup>77</sup> 全集二二巻 三四頁
- <sup>78</sup> 全集二二巻 三四頁
- <sup>79</sup> 全集二二巻 三四頁
- <sup>80</sup> 全集二二巻 四二頁
- <sup>81</sup> 全集二二巻 四一頁 ここでもやはり、内村におけるヘブライズムの考え方が民族のメタファーを通して表現されている点は興味深い。
- <sup>82</sup> 全集二二巻 四一頁

<sup>83</sup> 全集二二巻 四二頁

<sup>84</sup> 全集二二巻 四三頁

<sup>85</sup> この「日光を楽しみ得る」幸福についてであるが、内村が「実に低き理想」（全集二二巻 二六頁）と酷評するところのコヘレト書二章二四節等で述べられている飲食の快と何が異なるのかが問題となる。本テキストでは内村は特に論じていないが、おそらく内村のキリスト教思想になかには「天然」を通して神の啓示に至るという一種の自然神学が存在することと関係があるのであろう。内村は「天然」を通して神に至ろうとするが、それは自然の秩序の背後に造物主の存在を見るものというよりは、個々の自然物に直に触れて経験することでそこに神意のあらわれを見ようとするものであった。ここでも、日光という具体的な存在者が対象となっている点は指摘できるであろう。鵜沼裕子「内村鑑三における神と天然」内村鑑三研究 一一号 キリスト教図書出版社 一九七八年 七二～九〇頁 および 小原信「内村鑑三における『天然』」内村鑑三研究 一八号 キリスト教図書出版社 一九八二年 二九～七〇頁を参照。

<sup>86</sup> 新共同訳では「光は快く、太陽を見るのは楽しい。」となっている。

<sup>87</sup> 全集二二巻 四二頁

<sup>88</sup> 全集二二巻 四三頁

<sup>89</sup> ここで内村は「哲学者カントは言ふた、全宇宙を 통하여最善と称すべき者は善き意志であると」（全集二二巻 四三頁）と、カントについてごく簡単に言及している。一九一五年の時点で内村が読んでいたないしは読んでいた可能性のあるカント関係の著作は、内村自身の著作や日記や書簡と北海道大学附属図書館の内村文庫の目録The catalogue of Uchimura Library（1955年 北海道大学図書館）によれば、

・ Friedlich Paulsen, Immanuel Kant: his life and doctrine, Translated by J.E.Creighton & Albert Lefevre, New York, Charles Scribner's Sons, 1902 （一九〇九年九月一〇日『聖書之研究』一一二号「所感」欄に掲載された「単独の称讃」というテキスト（全集一六巻 四三三頁）を参照。なお、同年の八月一七日の住谷天来宛の書簡にも、この本のことが言及されている。全集三七巻 三〇四頁参照。なお、Friedlich Paulsen(1846-1908)とは、ドイツの新カント派の哲学者・教育家でベルリン大学教授をつとめた人物である。内村が当時の最新のカント研究を参照していたことが伺える。もっとも、「かなりの場合、内村がカントならカントについての記事を読んで、カントがわかったように思っていた傾向があった」（太田雄三『内村鑑三 ——その世界主義と日本主義をめぐって——』研究社 一九七七年 四五頁）と指摘する先行研究も存在することには注意を払っておく必要がある）

・ Immanuel Kant, Critique of pure reason, Translated by J.M.D.Meiklejohn, Lond. George Bell & Sons, 1890（ただし、購入した正確な時期は不明である。）

・ Kant's introduction to logic, and his essay on the mistaken subtilty of the four figures, Translated by Thomas Kingsmill Abbott, Lond. Longmans, Green. 1885（ただし、購入した正確な時期は不

明である。)

・ Immanuel Kant, *Fundamental Principles of the Metaphysic of Ethics; Extracted from “Kant’s Critique of Practical Reason”*, etc., 1911 (全集三五巻 三二九頁の一九二八年六月一日の日記で初めて言及されているが、その時点で「復習した」と述べられており、以前に読んでいたとしてもおかしくはない。)

である。しかし、内村が書名を述べていない以上、管見の限り、詳細は不明である。しかし、この箇所ではカントとイエスとコヘレトとが同じ種類の精神（「善を行すを以て最上の<sup>よろこび</sup>歡喜となす其<sup>こころ</sup>意、是れ神の<sup>こころ</sup>意」全集二二巻 四三頁）であるとされており、内村のカント理解の中身を垣間見ることができる箇所である。

<sup>90</sup> 全集二二巻 四一頁

<sup>91</sup> 全集二二巻 四一頁

<sup>92</sup> ここでは特に「知っておくがよい。神はそれらすべてについてお前を裁きの座に連れて行かれると。心から悩みを去り、肉体から苦しみを除け。」の箇所が主題となっている。

全集二二巻 四四頁

<sup>93</sup> 全集二二巻 四三頁

<sup>94</sup> 全集二二巻 四四頁 なお、内村はここでコヘレト書八章一四節「この地上には空しいことが起こる。善人でありながら悪人の業の報いを受ける者があり、悪人でありながら善人の業の報いを受ける者がある。これまた空しいと、わたしは言う。」を参照している。

<sup>95</sup> 全集二二巻 四四頁

<sup>96</sup> 全集二二巻 四四頁

<sup>97</sup> 全集二二巻 四三頁

<sup>98</sup> 全集二二巻 四五頁

<sup>99</sup> 全集二二巻 四五頁

<sup>100</sup> 全集二二巻 四四頁

<sup>101</sup> コヘレト書の一二章九節以下

<sup>102</sup> 全集二二巻 四五～四六頁

<sup>103</sup> A critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastes by George Aaron Barton. -- Charles Scribner's Sons, 1908. -- (The international critical commentary) p.181 Bartonはここで従来の註解者の解釈を四つに分類したのち、四つ目の「寛大さへの訓戒 (an exhortation to liberality)」が正しいという判断を下している。

<sup>104</sup> A critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastes by George Aaron Barton. -- Charles Scribner's Sons, 1908. -- (The international critical commentary) p.181～2

<sup>105</sup> A critical and exegetical commentary on the book of Ecclesiastes by George Aaron Barton. -- Charles Scribner's Sons, 1908. -- (The international critical commentary) p.144

<sup>106</sup> 『<旧約聖書XIII> ルツ記 雅歌 コーヘレト書 哀歌 エステル記』 訳者 月本昭

男・勝村弘也 一九九八年 岩波書店 一〇五頁

<sup>107</sup> Ecclesiastes; or, The Preacher with notes and introduction by E. H. Plumptre. -- Stereotyped ed. -- The University Press, 1898. -- (Cambridge Bible for schools and colleges) p.229

<sup>108</sup> Ecclesiastes; or, The Preacher with notes and introduction by E. H. Plumptre. -- Stereotyped ed. -- The University Press, 1898. -- (Cambridge Bible for schools and colleges) p.230 なお、原文では引用箇所は一文であるが、訳出の際に論者が適当に区切って訳出した。

<sup>109</sup> Ecclesiastes; or, The Preacher with notes and introduction by E. H. Plumptre. -- Stereotyped ed. -- The University Press, 1898. -- (Cambridge Bible for schools and colleges) p.230

<sup>110</sup> Ecclesiastes; or, The Preacher with notes and introduction by E. H. Plumptre. -- Stereotyped ed. -- The University Press, 1898. -- (Cambridge Bible for schools and colleges) p.230

<sup>111</sup> 「われわれはその意味では彼の聖書解釈を聖書の実験的解釈という語で言いあらわすことができよう。」（土肥昭夫『内村鑑三』人と思想シリーズ 日本基督教団出版部 一九六二年 一九〇頁）とあるように、内村にとって聖書の言葉が神の言葉となる場合は「実験」であったと考えられる。この点について本論では扱うことができなかった。しかし、内村のコヘレト書解釈が当時の英米圏の聖書学の知見を踏まえつつ、カントやキルケゴールといった全く別の議論を持ち込んでいることを思えば、内村の聖書解釈は当時の英米圏の聖書学と自己の「実験」との二つの中心を持つ楕円の構造を有しており、両者は分裂することなく、その間で解釈学的循環が成り立っていると言うことができるだろう。今後の研究課題としたい。

<sup>112</sup> 興味深いのは、現代の聖書学の解釈にはこうした内村の解釈とは逆の解釈があることである。例えば、上村静は、「黙示思想とは、ヨブの問いに対する終末論的解答であり、因果応報論の究極形である。この因果応報論を全否定するとともに、ヨブ記における間接的な解答をさらに徹底させる思想書がコヘレトの言葉である。」（上村静『旧約聖書と新約聖書 「聖書」とは何か』新教出版社 二〇一一年 一五三頁）とあるように、コヘレト書をまさにこうした終末論に対する全否定と解釈している。このようなズレが生じる原因としては、内村が現代の聖書学では後代の挿入として退けられる箇所、例えばコヘレト書の一二章九節以下も含めて全体的に解釈し、さらに新約聖書というコヘレト書に対して外部にあるテキストでもって補完して解釈していることが考えられる。今後の研究課題としたい。

<sup>113</sup> 興味深いことに、本論で扱ったテキスト全てが一九一五年という再臨運動前夜に当る時期になされたことを思えば、この事実は内村の再臨信仰形成にコヘレト書の解釈がある程度の役割を果たしたことを示唆している。むしろ、管見の限り、内村のコヘレト書解釈がこの時期以外に存在しないので、内村の再臨信仰形成にコヘレト書解釈が重要な役割を果たしたとは断言することはできないが、終末論的な主題が再臨運動の直前の時期の聖書解釈に見られることは注目に値する。なぜなら、この事実は再臨運動が娘ルツの死（1912年）

や第一次世界大戦（一九一四年）、アメリカの友人ベルから送られた雑誌『日曜学校時評』（The Sunday School Times）の読書（一九一六年）といった出来事から生じたという説明だけでは不十分であり、聖書解釈の営みもまた原因であることを示しているからである。実際、黒川知文は内村の再臨運動の要因として上記の理由に加えて、聖書研究も挙げている。「確かにこれらのことは内村自身も述べていて、十分に推定できるが、聖書研究によって再臨の教義の重要性を知るに至ったことがより直接的な要因であったと考えられる。」（黒川知文『内村鑑三と再臨運動』新教出版社 二〇一二年 一〇八頁）黒川は再臨運動の要因となった内村の聖書解釈、特に旧約聖書の解釈を具体的に挙げることはしていないが、再臨運動前夜という発表時期や終末論が重要な役割を果たしている内容を考慮すれば、コヘレト書解釈が、内村が「再臨の教義の重要性を知るに至った」聖書註解の一つであると十分に考えられることである。むしろ、再臨運動の要因となった聖書解釈は複数存在すると考えられるので、本論ではコヘレト書はあくまでその一つであると現時点では結論づけたい。今後の研究課題である。

<sup>114</sup> 「基督再臨を信ずるより来たりし余の思想上の変化」全集二四巻 三八五頁

<sup>115</sup> ここに民族のメタファーが介在していることは既に指摘した通りである。

<sup>116</sup> 全集二二巻 五七頁

<sup>117</sup> この問題に関連して、内村が一九一一年に現した「基督教の最大問題」というテキストにおいて、Edwin HatchのThe Influence of Greek Ideas and Usages upon the Christian Churchに言及しつつ、「基督教が使徒等の手を離れてギリシヤ人の手に渡りてより、説教、洗礼等儀礼慣例の事に止まらず、教義の根本たる信仰其物に関はる思想までが全く一変したのである。」（全集十八巻 二七一頁）「如何にして異教化以前の基督教を地上に実顕する事が出来るか、語を換へて言へば、如何にして使徒時代の基督教を我等の有となす事が出来る乎、基督教の問題にして是れよりも大なる者は無い」（全集十八巻 二七四頁）と述べている点が注目に値する。内村はこの本を通して福音のヘレニズム化を問題とし、改めてヘブライズムに純化していこうとしているのである。内村鑑三文庫には同名の作者による同名の著作が収められているが、それに従えば、この本はEdwin Hatch, The Influence of Greek Ideas and Usages upon the Christian Church; the Hibbert lectures for 1888, Williams & Naorgate 1907 である（The catalogue of Uchimura Library 1955年 北海道大学図書館を参照）。そして、このテキストに関する感想を内村は「我等をして此国に於て千八百年前の元始の基督教を新たに始めしめよ、イエスの福音は日本国に在りて千八百年間欧米人に由て妨遏されし其発達を再び新たに開始すべきである、斯くして日本国の基督信者は自己を救ふに止まらず、全世界に元始の清き福音を供給する大なる責任を担ふべきである。」（全集十八巻 二七六頁）として結んでいる。この記述から、内村がヘブライズムへの純化が必要だと考えており、しかもそれが彼のキリスト教理解や日本における教会のあり方や第二の宗教改革としての無教会といったテーマにまでつながっているのがわかる。森山徹は内村に

は反ユダヤ主義的な言説が少なく、さらには再臨運動の時期に内村がユダヤ人の歴史的な存続を神の歴史的介入の証人としてみるユダヤ人証人説を唱えていることを指摘しているが、時期的に考えても、内村のそのようなヘレニズムとヘブライズムとの理解やユダヤ人理解が当時の英米圏での議論に由来していると考えられるのではないだろうか。森山徹「再臨信仰と内村鑑三のユダヤ観（上）」内村鑑三研究 四四号 教文館 二〇一一年 一四八～一六三頁、同上「再臨信仰と内村鑑三のユダヤ観（下）」内村鑑三研究 四五号 教文館 二〇一二年 三～二六頁を参照。

(わたなべ・かずたか 京都大学大学院博士後期課程)